

# 経験の記述：働きの存在論（2）— オートポイエーシスにおける二重の自己

稲垣 諭（文学部）

キーワード：自己、オートポイエーシス、サイバネティクス、構造、機能

## 1 自己の設定

以下の本論を貫くものは「二つの自己」という主題であり、システムの機構を扱うことを課題とした以前の拙稿「経験の記述：働きの存在論（1）」<sup>1</sup>の続編でもある。ここで主題となる「自己（self, auto, sich, Selbst）」は、そのままでは日常を生きる「私」も、哲学的な「自我」や「主観性」も、臨床的な「患者」や「医師」、「セラピスト」も意味しない。主観性の哲学を復権したいわけでもない。そうではなく、より広範囲に見られる世界事象、とりわけ特定の単位要素が「動的にクラスター化/集合化する」現象を包括できるものとして「自己」というタームを設定しようとしている。

いまだ魅惑的な仮説にとどまるラヴロックの「ガイア理論」は、地球、とりわけ大気や海流を含んだ生命圏を一個の活動体とみなすものであった<sup>2</sup>。確かに人間を含む生命圏にとって、地球という環境はいまだ取り外すことのできない生存条件である。

とはいえ、地球表面を人間の皮膚と同サイズに見立てれば、生命圏が維持されているのは、皮膚上の見えないチリや細菌の集合のように、ごく表層的な場所にすぎない。つまり、ラヴロックの仮説をさらに拡張し、地球という惑星をひとつの「自己」として設定した場合（マントル対流や、核における化学反応、重力の均衡等々も含め、何を地球という自己の動的クラスターとみなすかには様々な工夫が必要であるにしても）、人間を含めた有機体の生存や絶滅は、地球という自己にとっては測定誤差内で処理される事象にすぎない。

その意味では生命圏は、地球という惑星の環境条件にすらなっていない。生命圏が絶滅したとしても、地球は相変わらず太陽系の公転運動を繰り返していこう。したがって「地球・環境問題」とは、語の選定からいっても正確ではなく、本来は人間が生存可能な領域を確保するという「人間・環境問題」にすぎないことが分かる。こうした現実感、地球をひとつの自己と設定することで初めて見えてくる。

一定数の異なる元素からなる高分子が自己組織的にタンパク質として組み上がり、それが触媒とし

<sup>1</sup> 拙論：「経験の記述：働きの存在論—ドゥルーズ・ガタリとオートポイエーシスの分岐（1）」、『「エコ・フィロソフィ」研究 vol.6』（エコ・フィロソフィ学際研究イニシアティブ編、2012）91-107 頁。

<sup>2</sup> 「私たちはガイアを、地球の生命圏、大気圏、海洋、そして土壌を含んだひとつの複合体と定義している」。J. ラヴロック：『地球生命圏—ガイアの科学』（星川淳訳、工作舎、1984年）36頁以下参照。

て同じタンパク質形成の速度調整に関係する。あるいは、街頭のデモ隊を警察官が制止しようとして行った威嚇発砲が逆に集団の暴徒化を引き起こしたり、何気ない SNS 上の発言がヒット商品を生み出したりもする<sup>3</sup>。本来離散的で無関係な物事が、何かをきっかけとしてひとまとまりの現象として集合化し、質化する現象（以下ではそれを「個体化(individualizing)」と呼ぶ）がある。ここでいう「個体」とは、それ以上に分割してしまえば、その特性が失われてしまう経験の動的まとまりのことである。そしてこの「個体化」は特定の要素を巻き込むネットワーク化の運動（システム）として実行され、そのネットワークが閉域を動的に形成しつづけた結果が「自己」と呼ばれる。その意味では、自己も個体も、個体化やネットワーク化という「作動/オペレーション」のプロセスの産物であって、その逆ではない。

精神科臨床や心理臨床に近づけていけば、ある人を攻撃しつづけることで初めて安定する自己（個体）があり、あるいは、体重の減少プロセスが継続されていないと安定できない自己（個体）もある。さらには攻撃するか、拒食をするかというように自己の安定をスイッチングするように複雑化させ、分散させる戦略もあるだろう。また、セラピストと患者の関係性から生まれるコミュニケーションのあり方は、セラピストや患者のどちらか一方が制御できるようなものではない。臨床のコミュニケーションはそれ自身が、一個の自己として自律的に展開して行く。

本稿のターゲットは、こうした事例における動的まとまりとしての「自己」が、どうすれば次の局面へと、あるいは別様な安定系としての自己へと位置をずらす、ないし変態（メタモルフォーゼ）するのか、さらにはどのような安定が次の展開への可能性を宿すレジリエントな安定といえるのか、そのシステムの、現象学的手がかりを特定することである。

## 2 二つの自己

自己の設定に続いて、表題にあるように、なぜ二つの自己を区別するのかを明らかにしておく。この自己の「二重性」は、「反復」と「変化」、「安定」と「崩壊」という二つの拮抗する「運動の差異」としてパラフレーズでき、それらは条件に応じて高次概念としての「構造」と「機能」にも対応するものとなる。その場合、「反復する自己」と「変化する自己」、「構造的自己」と「作動する自己」という仕方で自己が差異化されるが、その両者を貫いているのが恒常的な「形成運動」である<sup>4</sup>。

つまり反復も変化も、構造も機能も、それぞれが固有な仕方で生成し、創発し、産出されるのであって、そのきっかけとなる運動の実在だけが、ここでの構想を原則として支えている。その意味では「なぜ無ではなく、運動があるのか」という命題が、世界の公準という意味での作業仮説となっている<sup>5</sup>。単純化すると第一に形成や産出の運動があり、そこから運動のモードとして二つの自己が順次

<sup>3</sup> P.オームロッド:『経済は「予想外のつながり」で動く』（望月衛訳、ダイヤモンド社、2015）参照。

<sup>4</sup> 河本英夫:『オートポイエシスの拡張』（青土社、2000）、20 頁以下参照。

<sup>5</sup> 運動も、働きも、力も、それらに巻き込まれる物性とは独立に観察も特定もできないが、それらなしに経験科学の理論化もできない。稲垣論:「経験の記述:働き存在論:ドゥルーズ・ガタリとオートポイエシスの分岐(1)」、『エコ・フィロソフィ研究』（2012）、95-112 頁参照。

成立するという構図となる。

例えば思弁的唯物論の旗手であるメイヤサーは、ベルクソンの純粹知覚論を展開することで、「生成がある。そして、生成とは諸々の流動とそれらの遮断のことである」<sup>6</sup>という基礎命題を定式化しているが、ここまでは上記の形成運動についての道具立てとそれほど変わらない。むしろ議論が分岐するのは、メイヤサーが生成を「諸々の流動とそれらの遮断」という二つのオペレーションを高次化させて捉えようとしているのに対し、本稿は「オートポイエーシス(autopoiesis)」というシステムの機構を用いようとしている点においてである。

今まさに触れたように、この「二重の自己」という主題設定は、オートポイエーシス理論を下敷きにしている。より正確には、オートポイエーシス理論を構想したチリの研究者である H.R.マトゥラーナと E.J.ヴァレラの考えの骨格を、より明示的に、かつ拡張的に活用できるように理論整備した日本の哲学者、河本英夫の理論構想を下敷きにしている。

オートポイエーシスは、マトゥラーナとヴァレラが生命システムを記述するための理論構想として提示したのちに、社会学者の N.ルーマンによって社会システムを観察し、記述する方法に転用され、河本英夫によって行為存在論へと組み替えられてきた。

このように並列的に記することは容易なのだが、その内実を理解しようとするとその抽象度の高さと、言語記述の限界に挑む言い回しによる難解さに愕然とするのが実情である。そこで以下では、より具象化された仕方で、しかも多くのフィールドで活用可能な形になるよう、この「二重の自己」とは何か、そしてその構想を支える「オートポイエーシス理論」とはどのようなものかを三つの事例を通して明らかにする。

### 3 オートポイエーシスという「経験」—3つの事例

#### 【事例1】：システムの同一性：作動する自己と構造的自己<sup>7</sup>

孵化したオタマジャクシは、成長してカエルになる。小学生にでもなれば誰でも知っている生物学的事実である。そして私たち観察者は、あのオタマジャクシが立派になったものだと感嘆の声を上げる。ここでは、以前のオタマジャクシ A がカエル B になったと、すなわち  $A=B$  として観察者によって認定されている。

とはいえオタマジャクシとカエルには、似ている部分がほとんどない。体色も変われば、尾ひれもなくなり、手足も生えてくる。さらには行動空間も水中から、水陸へと拡張され、泳ぎ方も、行動の選択肢も、食生活さえも変わってしまう。どうやら内臓も新しく作り変えられるという<sup>8</sup>。そうだとするとオタマジャクシとカエルには、生物学的な身体構造上、同じものが存在しないことになる。あ

<sup>6</sup> C. メイヤサー：「減算と縮約—ドゥルーズ、内在、『物質と記憶』、『現代思想 vol.41-1』(岡嶋隆佑訳、2013年、青土社)、157頁参照。

<sup>7</sup> 以下の事例1、2は、河本がたびたび用いるものである。河本英夫：『メタモルフォーゼ』(青土社、2002)、41頁以下参照。

<sup>8</sup> 里勝利：『変態の細胞生物学』(東京大学出版会、1990)参照。

えていえば、両生類特有の「ぬめり」くらいであろうか。

オタマジャクシとカエルを、同一の個体が成長したものと認定するには、何が担保されている必要があるのか（図1）。単に経過観察する観察者が、みずからの記憶の連続性（例えば同じ水槽という空間にいつづけたといった）を用いて外側から同一性を与えているだけで、AとBは個体としては全くの別物だという話なのだろうか。カエルには人間のように言語も、それによって表出可能なエピソード記憶もおそらくない<sup>9</sup>。

### 【図1】 A=B or A≠B ?

ではさらに、ミクロな物質レベルはどうか。生命体を構成するタンパク質は、分子レベルで見ると、およそ半年から一年で全て入れ替わってしまうという。これを生体システムの動的平衡 (dynamic equilibrium) という<sup>10</sup>。同型性を保っているように見えるオタマジャクシでも、それを保つために自己を構成する要素を分解すると同時に作り出し、組み替えている。

これは人間でも、動物でも、大腸菌でも変わりがない。だから私たちは食事をとり、排泄し、熱を放出する。飲み食いをせずついにいれば、いずれ生命は同型性を失い、死に至る。とはいえ、食べたものがそのまま生命を構成することもない。体のどこかに、パンが残っていたり、カレーのルーが体を流れることもない。つまり食べられたものは、一度、たんぱく質からアミノ酸レベルにまで分解され、その後、体内で改めて必要な要素へと組み直される。そうだとすれば、AとBという現象相互の比較では、上述の生態行動レベルにとどまらず、ミクロレベルでも両者を貫く同一物がないことになる。

ここで視点の転換が必要になる。「A」においても、「B」においても、「AからB」への変態においてもただ一つ継起していたのは、そのつどの個体を反復的に産出する「働き」そのものである。みずからの身体を形成し、維持し、時に全面的に組み替える「形成運動」は、誕生から死まで一貫しており、止むことがない。オタマジャクシもカエルも、その中間形も、それらすべてを貫いているのが「形成プロセスの継起性」である。

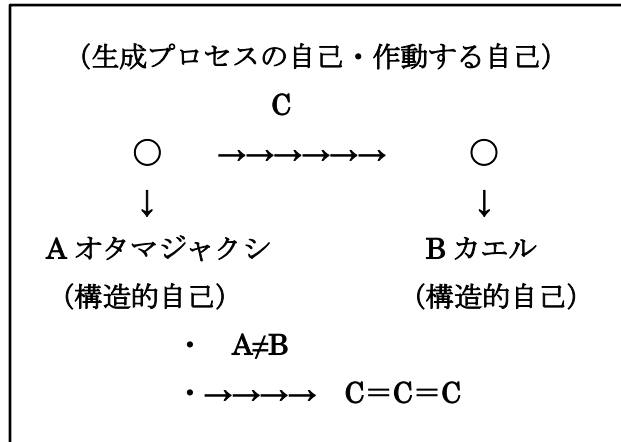
この場面にすでに「二つの自己」の問題が告示されている。一方は、オタマジャクシやカエルといった観察者にとっても明らかな確固たる構造と形態からなる自己である（構造的自己）。この構造的

<sup>9</sup> 哺乳類などの高等動物においては、記憶が同一性を担保するというのが、さしあたり考えられる候補である。とりわけ、動作や癖といった非宣言的記憶の残留が同一性を確認する手がかりにはなる。とはいえ、ここで改めて「残留」とは何かが問われてしまう。行動レベルで同じことを繰り返していれば、それが同一性を保証することになるのか、そして行動レベルで確認できるものがなくなれば、同一ではないことになるのか。また次に記憶の脳内レベルではどうか。本論でも述べるように、神経系における記憶を物質レベルで特定することは極めて難しく、神経アセンブリによる記憶のネットワークパターンも成長に応じて刻一刻と変化してしまう。しかも仮に神経パターンという関係性の同一性が特定できたとしても、生命の同一性は、そのような科学的操作を用いてそのつど判定しなければならないような煩雑なものなのかが問われてしまう。

<sup>10</sup> 福岡伸一：『生物と無生物のあいだ』（講談社現代新書、2007）参照。

自己は、A と B とでは全く異なるものとなっており、そこに同一性はない。それに対して、A においても B においても個体それ自体を継起的に形成している運動の自己がある（作動的自己）。この作動的自己こそが、自らを生み出すプロセスを途切れなく続けているという意味での同一性を担保する（図 2）。

【図 2】



要約すると、「構造的自己」とは、そのつどの自己の安定性を物質的形態とともに空間内に実現する自己である。そのため観察者にも容易に特定される<sup>11)</sup>。それに対して「作動する自己」とは形成運動が継起すること、すなわちプロセスの継起の一貫性によって成立する自己である。オタマジヤクシとカエルの同一性はこの「作動する自己」によって貫かれ、担保されるが、それ自体は観察者には見えない。この「働き」の見えなさ、現れなさに迫り、展開するために「現象学」という哲学のアプローチが必須となる。あえて言語表記すれば、「一貫して生き続けていることの同一性」であり、見えるものの背後で「働きの強度」として感じ取られる生の感触でもある。

しかも、この自己の同一性は、物質といった何か別の第三項によって支えられてもおらず、偶発的な要素を多分に含む。つまり、**形成運動が継起しつづける保証はどこにもない**。その意味では作動的自己も構造的自己も、偶発的な形成運動に遅れて生じるだけではなく、たえず形成運動に翻弄されるものでもある。

例えば、各種企業が行う活動とは、職種に応じた種々の業務手続きを継続することである。それは請求行為でもあれば、製品の作成指示でもあるだろう。その手続きが多様化し、複雑化すれば、そのための人材や備品、オフィス等の拡充が必要になる。そうであっても種々の手続きは一貫して継続されており、一旦経営破綻等に追い込まれば、手続きの継続が途絶え、残るのは備品とオフィスという運動を欠いた構造部材だけになる。この場合、企業活動という「作動する自己」が消滅し、オフィ

<sup>11)</sup> 河本は、本論における「構造的自己」を「位相的自己」として、「作動的自己」を「産出的自己」、ないし「機能的自己」と名づけてもいる。河本英夫：『システム現象学』（青土社、2006）379頁、『メタモルフォーゼ』（青土社、2002）、41頁参照。

スや備品からなる「構造的自己」の残滓だけが残されたと理解することができる。

### 【事例2】：胃と消化の関係—メタモルフォーゼと自己の境界のズレ

事例1におけるカエルの変態において二つの自己の問題が提示されていた。オタマジャクシやカエルには、それぞれの構造的自己でなくては実行できない機能性がある。泳ぐことも、跳ねることも、鳴くことも、獲物を捕らえることもそうである。さまざまな機能を実現するには、それにふさわしい構造が必要である。それは体躯であり、内臓であり、感覚器である。見るという機能は、眼球という構造が、生殖という機能は、生殖器が担っている。ここでは機能性と構造とが対になって特定される。

ここで構造が先か、機能が先かという問いが立つ。おそらく構造が先だと答えたくなるのだと思う。というのも眼球や胃という構造なしに、視覚や消化の機能も成立しないからである。

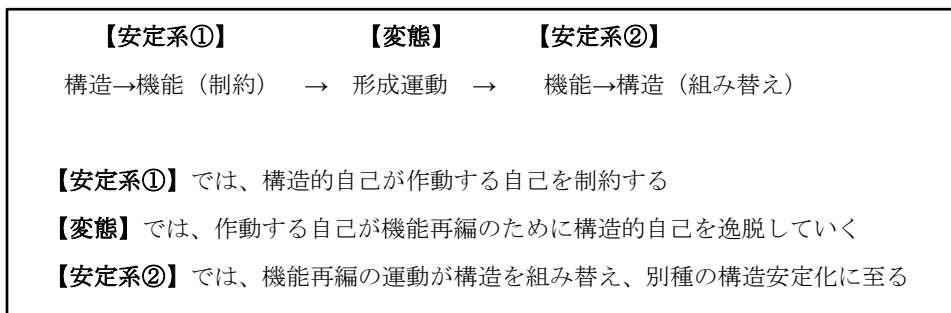
しかしである。そもそも視覚や消化という機能を支える構造は当初どのようにして成立したのか。オートポイエシスシステムでは、構造が先か、機能が先かという問いが無効になる地点からシステムを立ち上げる記述を行う。マトウラーナとヴァレラが取り組んだのは、生命が一個のシステムとして立ち上がってくるさいの機構の解明だからである。

だとすれば最初にあるのは、いまだ構造でも機能でもない産出運動となる。この産出運動が継続することで、凶らずも何らかの構造が出現したり、機能が発現する。一般に機能性は構造に遅れて成立するように見えるが、だからといって構造と機能が常に一対一に対応しているわけではなく、むしろ逆に機能性に誘導されて構造が形成されることも多々ある。

例えば胃という構造は、消化の機能を担っているが、腫瘍により胃の大半を外科的に切除した場合、腸の一部が消化の働きを行うようになる。また別の事例では、視覚を失った患者の脳の視覚野が、視覚を用いずに生活しているうちに聴覚や触覚の情報に反応するようになったりもする。

胃の事例では、消化という機能性を維持するのに、胃とは異なる部位が胃と同様の構造と機能を備えるようになる。視覚野の事例では、他の機能性に応じて、視覚にしか反応しなかった脳部位が別の反応パターンを獲得する。これらの事例では、機能性の継続を維持する運動が構造を作り変え、新たに生み出すのである。

### 【図3】



ここでの「機能」と「構造」の関係性は、カエルの変態における二つの自己の問題とも共鳴している（図3参照）。オタマジャクシとして生存しているさいには構造的自己が、作動する自己（ここでは機能的自己）を制約している（オタマジャクシは陸に上がれない）。しかし、生体内および環境内の条件が整えられることで「変態（メタモルフォーゼ）」が始まる。この場面では、作動する自己の運動が、構造的自己そのものを逸脱し、組み替えていく。

**つまり、個体（システム）にはいつでもその構造を維持する運動と、その構造を組み替えていく運動との両者が含まれており、どちらの配分や力点が優位になるのか、あるいは拮抗するのかに応じて個体の運動特性がそのつど決まる。**

そうだとすると、ここから臨床的な含意を取り出すこともできるようになる。つまり、精神状態の不安定化における病的な要因が、どちらの自己に由来しているのかの特定ができれば、例えば作動する自己の運動を強めることで、苦しみに執着する構造的自己を組み替えていくか、あるいは、自生的思考のように、作動する自己の強すぎる運動を制約するように構造的自己の運動を定着させるといった介入が考えられるのである。

さらなる留意点として、二つの自己が占める「境界」の範囲が重ならないことが挙げられる。胃は、食物を分解し、再組織するために消化する。消化機能を担うのが胃である。とはいえ、例えば口腔内や小腸や大腸における膨大な細菌も消化機能の一端を担っている。だとすれば、ひとつの生物個体の消化機能が胃という構造だけによって実現されているというのはいかなることとなる。

むしろ、ドゥルーズ+ガタリが取り上げた蘭と雀蜂の共生事例のように、ある機能性の実現には、胃や蘭の花といった構造に限定されない多くの要因が働きのネットワークに参入している。受粉という「働き」の機能性が及ぶ範囲は、花の「構造」の範囲を逸脱していく。それは消化の「働き」の境界線と、胃の「構造」の境界線がズレているのと同様であり、「作動する自己」と「構造的自己」の境界線は次元を異にする。このズレこそが世界事象を多様にし、複雑にする。

このズレを特定することで初めて見えてくる事例には事欠くことがない。例えば、大学の構造的自己と、大学の機能性が及ぶ範囲（作動的自己の範囲）はもちろん異なる。ある大学生が外国で問題を起こした場合、大学はその責任の一端を担う必要がある。つまり、大学内での事務手続き（学生の懲罰の決定、メディア対応等）が必要になり、その手順が進行する範囲一切が、大学という機能的自己の内部の働きなのであって、それは大学の手続きを運営する各キャンパスや校舎という物理構造に制限されてはいない。学生が大学というシステムの構成要素であるかどうかは、作動的自己の運動を継続させる要素であるかどうかで決まるのであって、キャンパスや校舎の内部にいるか、外部にいるかとは関係がない。ここでも作動的自己と構造的自己の境界はズレている<sup>12</sup>。

<sup>12</sup> この境界設定に関して、前掲拙論:2012における「③働きと境界形成」を参照。

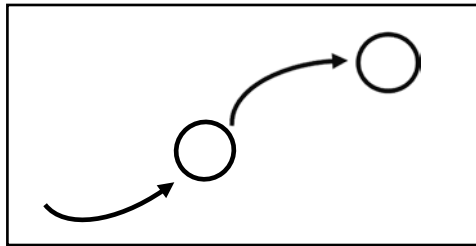
### 【事例3】：芸術制作と作風

事例②が提示したのは、あるシステムの運動には、作動する自己と構造的自己の二重性が含まれ、さらにそれぞれの境界はズレているということである。蘭の花も、雀蜂もそれぞれが個体としての構造的自己を構成しているが、彼らが実現する受粉という生殖機能も、食糧確保のための生存機能も、それぞれの「作動する自己」の働きのネットワークからみれば、異なる個体を巻き込む形で実現されている。

ここではそうした「働き」の一貫した継続性から、物事を、現象をとらえる感度が必要になる。個体が働きを行うのではなく、働きの運動に巻き込まれる形で個体がそれとして成立し、維持される場面を問うのである。

これまでの二つの事例を重ね描くようにして、最後に少し場面の異なる芸術作品の制作プロセスを取り上げる。下記の図における→は制作行為（働き）のプロセスを、○はそれによって作られる作品を意味している。

【図4】



【制作行為と作品】

制作行為と作品の間にわずかな隙間があるのは、制作行為によって作り出されるものの偶然性を強調するためである。制作行為には、いつでも暗黙への跳躍に似た不連続性が含まれている。どんなに正確な実行計画や完成図を描いても、出来上がるものにはズレが生まれるのが普通である。実はこのズレこそが創造性を担保する<sup>13</sup>。オートポイエシスでは、意図や目的性の連なりを垂直に横切るようにして不連続な経験（創発）が起こることを基本としている。というより、そうした偶発的生成をどこかで期待していなければ制作行為は継続できない。制作者が意図していない作品が作られてしまったり、本人の意図を良い意味でも悪い意味でも裏切る作品ができるところに制作行為の奥深さと難しさがある。

さらにこの偶然性の中に実は、次の制作プロセスの手がかりも含まれている。たとえば、意図からの逸脱を修正する方向に、または逸脱を増幅させ別の回路を拓くように次の制作への手がかりとなることがある。それゆえ、厳密に制作行為という働きの継続からだけ芸術作品の制作を見るとすれば、「何のために作品を生み出すのか」という問いへの答えは、「次の制作行為につなげるため」だけと

<sup>13</sup> 河本はそれを「産出的因果」と呼ぶ。河本英夫：『メタモルフォーゼ』（青土社、2002）、82頁以下参照。



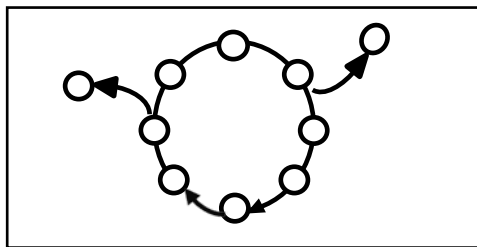
なる。

このことは、制作者が例えば依頼された作品を作り出すことを目的だと考え行為していたとしても変わりはない。このズレは、オートポイエーシスを展開したルーマンに倣って「ファーストオーダーの観察（制作者）」と「セカンドオーダーの観察（制作プロセスの観察者）」<sup>14</sup>の違いと理解することもできる。制作行為が次の作品制作につながらない限り、働きのネットワークは維持されず、作動的な自己は消滅してしまう。セカンドオーダーの水準で制作者は、ある作品を生み出したのちに、その作品の出来栄えや不満、やり残し等を手がかりにして、次の作品制作へと順次進んでいくことを反復するだけである。それはあたかも、制作という動的な手順の継続性に制作者が意図せず巻き込まれているかのようでもある。

またそれは、何度作品を作り上げても、制作することそのものから逃れられないことの別の表現でもある。制作者が作品を制御しているのではなく、作り出された作品と制作行為のネットワークの履歴が、制作者を制約してしまう。

そして、実際に制作行為が継続されていくと、うまく次の作品制作につながらない駄作と、次の制作の手がかりになる作品とに分かれてくる。手がかりとなる作品を頼りにさらに制作を続けていくと、今度はある段階で似たような作品ばかりが作られるようになる。それはある意味で、制作と技法の玄人化であり、制作プロセスという働きのネットワークが何度も同じ奇跡を描くように円環的に閉じることもある。ここが、作品群を貫く個性、すなわち作風（構造的自己）の形成となる。とはいえこの作風の形成は、制作者の実感からいえば、新しい作品が作れなくなってしまう手続き的な制約ともいえる（図5）。

【図5】



【作風という個性の形成—制作プロセスが閉じる】

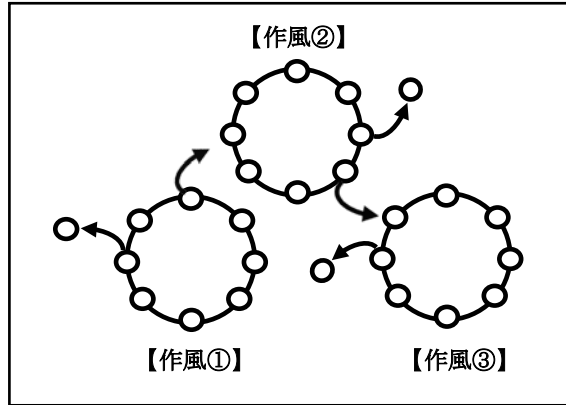
実際には、それぞれの作家の個性に応じて同じような作品を継続的に生み出すのを好む人もいれば、何度も作風そのものを壊しながら前に進んでいく人もいる。詩人のA.ランボーは20代前半で劇的な作品を残したまま詩作を辞めてしまった。そこで何が起きたのかは分からないにしても、才能の頂点や爆発のようなものに一度突き当たると次の制作に進めなくなることが度々起こる。

ただし、作風という自ら作り上げた制約から抜け出せなくなった場合、以前作品として手がかけてはいたが、次の制作につながらず打ち捨てられていた駄作のような作品が、あるいは、全く異なる体

<sup>14</sup> N.ルーマン：『近代の観察』（馬場靖雄訳、法政大学出版局、2004）参照。

験が手がかりとなって、別様の制作プロセスに入り込めることもある。そうなると今度は、その新たな制作プロセスを継続するための作品を作り続けることができる。それが結果的に、いくつもの作風を生み出すことに展開する（図6）。

【図6】

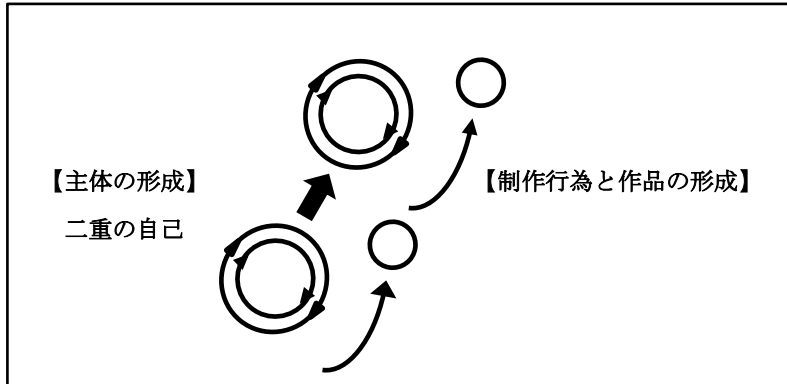


この図6を貫いているのは、一貫して制作プロセスが継続していること（作動する自己）だけであり、出来上がった作品群による作風（構造的自己）は、制作プロセスから見れば、副産物のようなものである。アコヤ貝が殻の内部に膨れ上がる副産物としての真珠に、自分の生存と生命空間を制限されるように、自ら作り上げたものが制作プロセスの最大の制約にさえなる。

そして、こうした制作行為と作品群とを、観察者や批評家が外的に見ることで、例えば「彼の前期の作品は作風①でこのような特徴があり、中期の作品は作風②でこのような…」といった構造的自己を用いた説明と配置を与えることが可能になる。

さらに留意されるべきは、この事例③には、身体行為を含む「制作という働き」と「作品」の関係だけしか明示されていないことである。つまりこの図の中には「制作者」がいない。しかしこれは正確ではない。というのも制作行為を継続し、作品を生み出していく中で、おのずと制作者もみずからを形成しつつづけているからである。つまり、それ自体オートポイエティックなシステムである「心的システム」を筆頭とする制作者は、身体を用いた制作行為を継続する中でみずからも形成している。そして、この主体としての「心的システム」にもまた同様の二重の自己の問題が含まれていることになる（図7）。

【図7】



作家の村上春樹は自伝風の『職業としての小説家』のなかで、芥川賞を含むヒット作と呼ばれる面白い作品をひとつ書くこと以上に、小説家として何十年にもわたって作品を作り続けることの難しさについて語っている<sup>15</sup>。それは上述の事例との関連でいえば、制作プロセスを継続させることの難しさであると同時に、制作プロセスを通して、小説家という自己を何度も形成していかなければならない難しさでもある。

制作プロセスのネットワークに寄り添い、居合わせるなかで形成される自己、それがここでの制作者である。つまり、小説家が小説を書くのではなく、執筆行為の継続を通して人は小説家になるのである。しかも何度も。その意味での主体は制作行為や作品を完全に制御してはおらず、むしろ逆に、制作プロセスと作品のネットワークの運動に応じておのずと形成されてしまう。制作者は行為を通して、自らの作動する自己のモードを変え、構造的自己を組み替えていく。

ここから取り出せる含意は、例えば臨床のプロセスにおいて、とりわけ精神療法的、理学療法的な臨床では、「医師やセラピストが患者を治療する」という単線的な経過を経ることはないということである。

むしろ、複数のシステムがカップリングする臨床では、**医師やセラピストは固有に何かを継続的に**行っている、にもかかわらず、その傍らにいた患者は、彼らが行ったこととは独立になぜか勝手に**治癒してしまうというのが実感として正しい関係となる**。確かに医師もセラピストもさまざまな試行を行うし、注意や気づき、認知を総動員して訓練を組み立てている。しかし最終的に患者は、自分で自分を変えていくのである。その関係に入らなければ、それ自体また展開を欠いた頭打ちの代償となり、別種の病的安定系となる<sup>16</sup>。

おそらく、こうした臨床を首尾よく実行している臨床家は、患者が変化していること以上に、自分自身の経験を変化させている。自ら変わらないものが、他者の変化にかかわれるはずはないからであ

<sup>15</sup> 村上春樹:『職業としての小説家』(スイッチ・パブリッシング、2015)。

<sup>16</sup> 稲垣論:「プロセスとしての臨床(2)—臨床-内-存在の現象学」、『エコ・フィロソフィ研究 vol.8』(「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ編、2014) 170頁以下。

る。

#### 4 サイバネティクスとオートポイエーシス

##### a. サイバネティクスの自己

前章の三つの事例を通して、オートポイエーシスにおける二重の自己の設定がどのような経験を捉えようとしているのかが明示されたと思う。そしてさらに最後の事例では、制作行為に含まれる「主体の形成」の問題にも触れた。

これまでも繰り返したように、「作動する自己」にかかわる働きのネットワークは、「構造的自己」のように必ずしも空間内に現れ（位相化し）ない。むしろ構造的自己の境界を変動させ、複合化するものだ。固有なシステムには、それぞれ二重の自己の問題が含まれている。カエルのような個体としての生命システム、胃のような器官システム、身体行為を含む制作システム、製作者の心的システムのそれぞれで自己は二重化して作動する。

そしてこの辺りまでの記述は、サイバネティクスを展開したベイトソンの記述ととても親和性が高い<sup>17</sup>。たとえばベイトソンは「自己なるもののサイバネティクス—アルコール依存症の理論」<sup>18</sup>という論考で「西洋に特徴的な『自己』の観念を支える一群の諸前提」を問題にしている。

ベイトソンは制御工学の観点から、「事象と事物のまとまりが、ある基準にそった複雑性と、ある基準にそったエネルギー需給関係を備えて作動しているとき、そこには間違いなく精神的特性が現れる」<sup>19</sup>と考えている。このまとまりとは、ベイトソンの代名詞ともなった「差異を生む差異」として次々と変換され、修正され、ある変数の最大化を目指したりすることで安定する、本論での自己の運動のことである。

この場面でベイトソンは、「精神」という語を全体論的に過度に拡張して用いることを推奨する。どういうことか。単純に言えば、「精神」は、どこか固有な場所や部位に宿るものではなく、脳、身体、環境という全体的な差異のネットワークの機能集合体として「精神的特性を示す」というのである。「調和的にはたらく一つの大きなアンサンブル—試行錯誤の原理で動き、創造性を持つその全体—にこそ、精神は宿る」<sup>20</sup>。その限りでは、サーモスタット機構をもつエアコンであっても、そこに因果的ループができてい限り、幾分かの精神的特性をもつことになる<sup>21</sup>。この辺りが、情報工学と生命科学、システム論を統合したサイバネティクスの真価である。

ここには、1) システムを相互作用の全体として見るというホリスティックな発想と、2) 相互作用

<sup>17</sup> サイバネティクスに関しては古典的名著である下記を参照。N.ウィナー：『サイバネティクス—動物と機械における制御と通信』（池原止戈夫・彌永昌吉・室賀三郎・戸田巖訳、岩波文庫）、D.O.ヘップ：『行動の機構—脳メカニズムから心理学へ（上・下）』（鹿取廣人・金城辰夫・鈴木光太郎・鳥居修晃・渡邊正孝訳、岩波文庫、2011）。

<sup>18</sup> G.ベイトソン：『精神の生態学』（佐藤良明訳、新思索社、2004）420-457頁参照。

<sup>19</sup> G.ベイトソン：『精神の生態学』（佐藤良明訳、新思索社、2004）428頁。

<sup>20</sup> G.ベイトソン：『精神の生態学』（佐藤良明訳、新思索社、2004）430頁参照。

<sup>21</sup> G.ベイトソン：『精神の生態学』（佐藤良明訳、新思索社、2004）430頁。

の意味づけが階層（論理階型）に応じて変化することを見抜くメタ認知的な観察者の導入が要請されている。ベイトソンは以下のような事例を挙げている。

「きこりが、斧で木を切っている場面を考えよう。斧のそれぞれの一打ちは、前回斧が木につけた切り目によって制御されている。このプロセスの自己修正性（精神性）は、木—目—脳—筋—斧—打—木のシステム全体によってもたらされる。このトータルなシステムこそが内在的な精神の特性を持つのである。正確には、次のように表記しなくてはならない。[木にある差異群]—[網膜に生じる差異群]—[脳内の差異群]—[筋肉の差異群]—「斧の動きの差異群」—[木に生じる差異群]…。サーキットを巡り伝わっていくのは、差異の変換体の群れである。…ところが西洋の人間は一般に、木が倒されるシークエンスを、このようなものとは見ず、『自分が木を切った』と考える。そればかりか“自己”という独立した行為者があって、それが独立した“対象”に、独立した“目的”を持った行為をなすのだと信じさせる」<sup>22</sup>。

ベイトソンはこの記述で、木を切るきこりという見かけの主体（自分）を超えて、木を切るという行為が、木—目—脳—筋—斧—打—木という継起的に循環するシステム全体の運動として自己（精神）を成立させることを示唆している。それは、すべてが差異の関係性のネットワークに包摂されることを意味する。「自分が木を切る」と考えている独立の行為者や、独立の対象は、幻想であることを暴くものでもある。

以下のような事例も挙げられている。

「杖に導かれて歩く盲人を考えても面白い。その人の自己は、どこから始まるのか。杖の先か、柄と皮膚の境か、どこかその中間か。こんな問いは、土台ナンセンスである。この杖は、差異が変換されながら伝わっていく経路の一部分にすぎない。それを横切る境界線は、盲人の動きを決定するシステム全体のサーキットを切断してしまうものだ」<sup>23</sup>。

「このシステムの境界は、生物の身体的境界とも、また一般に『自己』とか『意識』とか呼びならわされているものとの境界とも、まったく一致しない。『思考するシステム』と、いわゆる『自己』とのあいだには、何重もの違いがある」<sup>24</sup>。

システムが、多様な物事の差異のネットワークとして連鎖していること、そのことに疑いはない。木こりの事例でいえば、最初に打ち付けた木の切り口が、次に切り口をつける斧の動作を調整してい

<sup>22</sup> G.ベイトソン：『精神の生態学』（佐藤良明訳、新思社、2004）431頁。

<sup>23</sup> G.ベイトソン：『精神の生態学』（佐藤良明訳、新思社、2004）432頁。

<sup>24</sup> G.ベイトソン：『精神の生態学』（佐藤良明訳、新思社、2004）432-433頁。

る。しかもその際、一打目で消耗した身体のエネルギー量や、斧を握る手の汗、それによるグリップの変化、思考、目に入る風景、両足で踏みしめる大地の傾斜や強度が、各動作ごとに差異を作り出していく。すでに一太刀目でさえ、木の木目、足の立ち位置、踏ん張り方、意図的な目標設定という差異の網目に制御されている。

言い分として、ここまでは全て納得がいくことである。しかし問題は、ここまで差異のネットワークの連鎖を拡張してしまうことによる弊害がないかどうかである。あるいは、この差異のネットワークの連鎖(全体性)の境界づけを行なっているのは、「誰か(システム/観察者)」という問題でもある。蜘蛛の巣のようなネットワーク＝関係性理論の過度な拡張は、全体論的想定へと進んでいく。その場合、世界の分析ではなく、総合へと探求の方向性が誘導される。

科学史の豊かな素養をもつモリス・バーマンは『デカルトからベイトソンへ 世界の再魔術化』の中で、ライヒ、ユング、ベイトソンが求め続けた宇宙的全体性の理論を様々な文脈から読み込もうとしている。「全体論は近代人にたえず付きまとい、彼の意識の袖を執拗に引っ張りつづける。自分を世界から切り離す生き方を強いられながら、なお『私と世界はひとつなのだ』と言う前意識のこだまがいまでも近代人の耳元で響いている」<sup>25</sup>。

例えばこの宇宙的全体性とは幼児、未開人、狂人が、個体発生的に今もそれを生きており、系統発生的には1600年以前の西洋人まで生きてきた、自他の、心と身体、自己と世界の不分明的融合という無意識のことである<sup>26</sup>。とはいえこうした論旨は、西洋的な文明化、近代科学化の果てに私たちが見失ってしまったものへの憧憬と、それによって人間が疎外されつづけてしまうことの警鐘に終わってしまうものが大半である。つまり、確証はできないまま分かる人だけが分かる宗教性の経験に近くなる。

バーマンもある程度はそのことを危惧したうえで、「ベイトソンの思想のみが、科学を無視することなくかつ無意識の知に基づいている」<sup>27</sup>と述べている。つまり、ベイトソンだけが現行の科学にも接続可能で、なおかつ全体論的知の可能性を確保しようとしているということだ。しかしそれはどのようにしてか。

## b. ベイトソンと個体

何よりも懸念されるべきことを端的に言えば、ベイトソンの記述を敷衍すると、個々のシステムの個性が雲散霧消してしまう(実際、ベイトソンは「惑星大の精神」という表現も用いている)ように思えることだ。先の木こりの事例でも彼は、木こりが斧を木に打ち付ける場面をどこか頭上から俯瞰したヴィジュアルイメージをもち、その光景をあたかも全体的なシステムであるかのように記述している。

<sup>25</sup> M.バーマン:『デカルトからベイトソンへ 世界の再魔術化』(柴田元幸訳、国分社、2003)、191頁。

<sup>26</sup> 同上。

<sup>27</sup> M.バーマン:『デカルトからベイトソンへ 世界の再魔術化』(柴田元幸訳、国分社、2003)、218頁。

「木」、「木こり」という個体として明らかに異なる生命システムと、斧といった道具の「人工的環境」、大気や土壌といった「物理的環境」との区分は不明瞭になっている。そしてこのような不分明さは、上述したオートポイエーシス的な二重の自己の設定が行われていないことが最大の理由ではないかと考えられる。

例えば先に挙げたベイトソンの記述も、これまで作動する自己の特性を追跡してきた私たちには理解可能だろう。ベイトソンの記述は、差異で連結する「働きのネットワーク」に向けられていることから「作動的自己」の運動を徹底的に追跡していることは確かである。

しかしその結果、働きや生成プロセスから成立する「構造的自己」の記述がすっぽりと抜け落ちていく印象を受ける。物理的境界や生理的境界を横断する「作動する自己」の運動に巻き込まれながら、吹き溜まりのように成立する「構造的自己」の記述が見出せない。その意味ではサイバネティクスに個体化を語る仕組みがないのではないかとさえ思える。

### 【付論①：サイバネティクスと個体化】

ベイトソン流のサイバネティクスに個体化の仕組みがないというのは、正確な言い方ではない。彼の初期の人類学的な記述の中には、固有な文化システムの生成、文化の個体化を扱っているとみなせるものがある。この生成タイプを分析するものとして「分裂生成 (schismogenesis)」という理論が用いられている。

分裂生成には「対称的モード」と「相補的モード」がある。対称的とは、軍拡における競争や張り合いのように対等なグループ同士が同等な行為を用いて相互に促進し合う関係である。それに対して相補的なモードでは、支配—服従、養護—依存、見る—見られるというように、相互に行う行動が異なっても、両者が補い合うようにしてのみ関係性が作り上げられる。

どちらのモードも累積的に相互作用を高め合うため、それぞれのシステムはいずれどこかでクライマックスを迎え終焉に至るとベイトソンは想定している。そこには、「冷却（修正）機能を欠いた、正のフィードバック機構が組み込まれている」<sup>28</sup>からである。

にもかかわらず、システムが暴走せずに均衡を維持できるのはなぜか。ベイトソンが見出した手がかりは、ニューギニアのイアトムル族の調査における「ナヴェン」という儀式であった。詳細は省くが、これはイアトムル族の過度に演劇的で攻撃的である男性と、現実的で感傷的な女性という、相容れない役割（行動、発言、服装等々）を一時的に交換する儀式である。イアトムル族の集団が、分裂生成的な暴走に至ることがないのは、男同士の対称的關係と、男女の相補的關係に含まれる緊張の高まりをナヴェンが打ち消し、ガス抜きをしているからだと言え、ベイトソンは見ている。

ベイトソンは、イアトムル族に見出したこの仕組みを、より大きな文化生成のモデルにまで拡張す

<sup>28</sup> G.ベイトソン：『精神の生態学』（佐藤良明訳、新思案社、2004）439頁。

る。つまりどのような文化や社会でも、「分裂生成的緊張が種々の役割の交換・逆転によって緩和されている」と想定するのである。例えば、中世の公国のなかには、王と農奴の役割を一年に一日だけ交換する制度があったり、一般的な家庭では夫に強いられる妻が、台所では主人となるといった逆転例が挙げられている<sup>29</sup>。ここに、分裂生成によりシステムが分化し、個体化し、安定することを読み取ることもできる。

また、ベイトソンがバリ島のフィールドワークから見出した「バリの性格」には、この分裂生成的なシーケンスさえ存在しないという。それは、クライマックスの欠如であり、緊張の強度を繰り返し抑える定常型のシステムだと言われる<sup>30</sup>。その秘密をベイトソンは、バリ島では、子どもが累積的な感情や緊張の最大化に至らないような育児方法が伝統的に選択され続けてきたことに見ている。バリ島人にとって重要なのは、フィードバックが進んでしまう「最大化」ではなく、「最適化」であり、そこでは利潤追求も、地位や名声を競い合うこともないという<sup>31</sup>。

分裂生成の対称的、相補的な二つのモードは、正のフィードバックであり、ナヴェンの儀式は、それを抑える負のフィードバック的工夫となる。それに対してバリ島のシステムは、正のフィードバックがそもそも過剰化しない定常的な非分裂生成的均衡を維持していることになる。このようにフィードバックのモードや、その組み合わせを用いることで文化の固有性を説明するにとどまらず、ベイトソンは、個人的な性格や病的症状といった心的システムについての説明もこのモデルで行うことになる。

しかもここに、「論理階型理論」が導入される。これは、「集合の要素（メンバー）」と「集合それ自体（クラス）」とが同じ論理階層にないことを手がかりに、とりわけ統合失調症（分裂病）の病理モデルとして、コミュニケーションと、コミュニケーションについてのコミュニケーションとの混在、あるいは「二重拘束性（ダブルバインド）」とが病理の個体化を導くとする理論構想である<sup>32</sup>。

日常で私たちは、例えば「今の会話ってほとんど意味がないね」という会話を行う。会話についての会話である。こうしたメタコミュニケーションが、統合失調症患者においては欠落している、あるいは極度に低下しているとベイトソンは考える。患者が生育した家族の中でメタコミュニケーションが許されない状況が反復されたからである。つまりここで、一人の患者の病理と見えていたものが、母と父、兄弟、患者といった家族の関係性の中で構築されているという全体論的想定とつながることになる。ここが、ベイトソンを嚆矢とする家族療法の出発点である<sup>33</sup>。

例えば、激しい体罰を与えている体罰者が被体罰者に、「これは罰ではなく、愛であり、おまえのためだからだ」といったコミュニケーションを行なったとする。そうした場面で、被虐待者が、言行不一致の矛盾を指摘し、それに反抗したり、悪い冗談だと笑い飛ばせる強さがあれば、何の問題もな

<sup>29</sup> M.バーマン：『デカルトからベイトソンへ 世界の再魔術化』（柴田元幸訳、国分社、2003）、239頁。

<sup>30</sup> G.ベイトソン：『精神の生態学』（佐藤良明訳、新思索社、2004）177頁。

<sup>31</sup> M.バーマン：『デカルトからベイトソンへ 世界の再魔術化』（柴田元幸訳、国分社、2003）、242頁

<sup>32</sup> G.ベイトソン：『精神の生態学』（佐藤良明訳、新思索社、2004）288-319頁。

<sup>33</sup> L.ホフマン：『家族療法の基礎理論—創始者と主要なアプローチ』（亀口憲治訳、朝日出版社、2006）。



い。しかし相補的モードにある虐待者と被虐待者の関係性において被虐待者はその矛盾に気づいてはいけなく、指摘してもいけない。そんなことをすれば、相補的モードはさらに強化されるからだ。そこから帰結するコミュニケーションの階層化能力の欠如が、精神の病的状態を固定するというのである。

そうだとすれば、そうした家族の関係性を、例えば父と母の関係性を、コミュニケーションのあり方を変えることで、患者である息子の症状が間接的に消失するということが起こる。家族というホメオスタティックなシステム全体に介入し、調整するというのが家族療法の核心である。

また AA におけるアルコール依存症者の治療では、「飲まない自己」と「飲んでしまう自己」の、つまり理性的自己と非理性的自己の対称的、対立的関係をまず解除し、アルコールの力に全面的に屈している弱い自己を見出していくことを推奨する。その「降参」状態から、自己を変えるためのより「高次の力」（大いなるシステム）に身を委ねるように誘導するのである。

このようにベイトソンの構想では、分裂生成（フィードバック・モデル）のモードの違いと、コミュニケーションの論理階層性の混在と混乱から、文化、社会、個人的病理のシステムとしての在り方を特定し、精神療法としてそこへと介入するという方法が選択されることになる。これ自体は、多くの経験科学的探究に開かれた構想であることに間違いはなく、現在注目されている「オープンダイアログ」という対話中心の精神療法の基礎を固めていることも確かである。

とはいえ他方で、全体的なシステムを構成する個々の要素としての民族、患者、父、母という個人は、相互作用を行うものとしてあらかじめ前提されているようにも思える。全体化された文化や家族というシステムに力点が置かれるため、そもそも各個人を複合的に構成している社会システム、心的システム、身体システム、神経システムという異なるシステムの個性性を理解することを難しくさせてしまう。あるいは、それぞれのシステムを取り出せたとしても、そのシステムの要素集合の範囲が、システムそれ自身によって確定されるのか、あるいは、観察者の認識を通して確定されるのかは曖昧になる。

### c. 「システム—環境」差異とシステムの複数性

そもそもオートポイエーシスによるシステム論では、ルーマンが明示したように「システムと環境（その外部）」の差異が決定的に重要である。システムにとっては、「情報」の差異だけではなく、それが作動しながら連鎖する「要素」が、つまり自らを構成する要素が特定されねばならない。そしてオートポイエーシス・システムでは、この作動の継続に資する要素以外のものは、全てシステムの外部、すなわち「環境」に区分される。ベイトソンのサイバネティクスのように、連鎖する差異のシステム全体を俯瞰する視点は繰り返し自覚化され、括弧入れされねばならない。

例えば「神経システム」は、タンパク質からなるニューロンとそれらが形成するシナプスにおける電位活性と不活性というネットワークから、「社会システム」は、発話や言説、非言語の身ぶりといった外形的に特定可能なコミュニケーションの単位の連鎖から、「心的システム」は、表象やイメー

ジといった思考のネットワークから、「身体システム」は、行為を形作る個々の身体動作の連鎖からなる。それぞれのシステムが、直接、他のシステムの要素を産出したり、特定することはない。あるシステムの作動にとって他のシステムの一切は環境に区分される。ここが「作動的閉鎖性」といわれる所以でもある。

社会システムは、コミュニケーションの連鎖であるが、それは物質や身体と接続したりはしない。「昨日は楽しかった」という発話内容が、特定の物質を指定することはない。その意味では、コミュニケーションの連鎖はどこまで行ってもコミュニケーションであり、すでに閉じている。それが、ルーマンが指摘した社会システムの特性である。社会システムの自己の内部には、人間も、身体も、物質も存在しない。社会システムは一貫したコミュニケーションの連鎖として閉じている。

むしろ問題になるのは、この閉じた社会システムの中に、記号内容に応じた固有のパターンやモードが生まれることである。法システムや経済システムは、どちらもコミュニケーションであり、社会システムではあるが、コミュニケーションが接続する際のコード・規約が異なる。

また思考は思考に接続するだけで特定のタンパク質を産出したり、神経の活性化を引き起こしたり、身体動作を引き起こしたりはしない。脳梗塞により麻痺した身体を考えれば明らかなように、思考するから身体が動くというのはいかなる粗雑な想定である。どんなに意識的に思考しても動かない身体が麻痺した身体である。ということは、心的システム、身体システム、神経システムが、それぞれ固有な自己としての作動を行い、相互に連動する（カップリングする）中で、あたかも思考すれば身体が動くかのような幻想を心的システムに実感させるというのが実情なのである。オートポイエーシスというシステムを用いることによるメリットのひとつは、単純な線形因果的な思考の解除にある。

このようにオートポイエーシスでは、特定のシステムの作動と、それ以外のシステム（環境）との差異を見極めつつ、個々のシステム内部から見える現実を記述する。そこではシステムの自己を全体的に拡張していくのではなく、事象そのものの中に複合化されたシステムの関係性を見出し、それぞれの連動のモードを取り出すのである。

こうした局面では、ベイトソンがアルコール依存症者の治療において「**単一の単純変数の最大化が阻止される可能性の最大化に向かって進む**」<sup>34</sup>ことの大切さを説いていたことが再度重なってくる。彼が援用するアシュビーによる数学的理論からは以下のシステム原則が引き出されている。

- a. 複雑な相互作用システムでは、その中の変数が一方的に増長するのを抑え込むことが、システムの定常状態と恒存性を維持する鍵を握っている。
- b. どんな変数も継続して増加し続けると、システムに非可逆的变化が現れ、システムの働きが制限される。
- c. そのようなシステムにあっては、十分な可動幅を持った変数をいくつか確保しておくことが非常

<sup>34</sup> G.ベイトソン:『精神の生態学』(佐藤良明訳、新思案社、2004) 191頁。

に重要である。

この三つの原則は、示唆的であり、本稿の「作動する自己」と「構造的自己」という二つの自己の運動の関係性を捉え、変化させる際の手がかりになるものである。ただし、ここでの三つの原則は、健全なシステムの安定性を維持するものとして指摘されている。ということは、不健全なシステムにおいては、ある変数の増長をむしろ促すか、新しい変数を見出すことで、システムの非可逆的变化を誘導し、別の安定するシステムへと形成を促すことが必要となるということだ。そして最終的には、cの原則が、安定したシステムのレジリエンスを担保することとなる。しかもオートポイエーシスでは、複合化したシステムの連動体として、上記の原則が考慮されねばならないのである。

※本稿は、科学研究費、基盤研究 (C)「レジリエントな心的システム確立のための発達現象学的治療理論の構築」による研究成果の一端である。